

ラオス帰国研修員フォローアップ調査<その1>

日本での学びは今現場でどう生きているのか

2025年11月、JICA筑波の課題別研修「小規模農家の生計向上のための野菜生産技術」コースの一環として実施されたフォローアップ調査にて、ラオス人民民主共和国を訪問した。本調査は、日本で約8か月間の研修を受けた帰国研修員が、帰国後にどのような活動を行い、日本で学んだ内容が現地ですどのように活かされているのかを確認することを目的としている。あわせて、研修成果が個人にとどまらず、所属組織や地域にどのような影響を与えているのかを把握し、今後の研修内容を改善することも重要な狙いであった。本フォローアップ調査の結果は、本記事を含め全3回にわたって紹介する。

弊社ではこれまでも、中南米やネパールなどで帰国研修員のフォローアップ調査を行い、研修成果が技術移転にとどまらず、人材育成や組織強化へとつながっていく過程を確認してきた。今回のラオス調査も、そうした取り組みの延長線上に位置づけられるものであり、「研修後の時間」を経た現場の姿を直接確認する機会として実施された。ラオスは、過去25年間で18名が本コースに参加しており、ネパールに次いで研修員数が多い国である。

調査期間中は、帰国研修員が所属する首都ビエンチャンの Clean Agriculture Standard Center や、南部のチャンパサック県に位置する Chamapasak Agriculture and Forestry Collage などを訪問し、計9名の元研修員と再会した。また、彼らが実際に指導に



CASCにて活動報告をする帰国研修員

関わっている農家圃場や地域市場も視察した。事前に実施したフォローアップ質問票の結果を踏まえ、帰国研修員本人だけでなく、上司や同僚、農

家からも話を聞き、研修成果の現れ方を多角的に捉えるよう努めた。

現地で再会した研修員の姿からまず感じられたのは、日本で研修していた当時と比べた明らかな変化であった。農家の前で技術を説明する場面では、落ち着いた口調で要点を整理しながら話し、質問にも自信をもって応じていた。こうした姿は、日本での研修中に繰り返し行ったプレゼンテーションや実験説明の経験が、現場で確実に生きていることを示していた。ある研修員は、「技術そのものだけでなく、考え方や伝え方を学んだことが、今の仕事に役立っている」と語っていた。

一方で、今回の調査は成果を確認するだけでなく、現地ならではの課題を改めて認識する機会ともなった。ラオスの農業を取り巻く環境は日本とは大きく異なり、気候条件や利用可能な資材、市場規模や流通構造の違いから、日本で学んだ技術をそのまま適用できない場面も少なくない。研修員たちは、そうした条件の中で試行錯誤を重ねながら、技術を調整し、工夫しながら現地に根づかせようとしていた。



農家に説明する帰国研修員

研修の成果は帰国直後に完成するものではなく、現地での実践を通じて徐々に定着していくものであるという点である。研修で得た知識や経験は、日々の業務や農家との関わりの中で磨かれ、やがて組織や地域の力になっていく。今回のラオス調査では、そうした「途中経過」としての成果と課題が確認された。

フォローアップ調査を通じて改めて感じたのは、研修の成果は帰国直後に完成するものではなく、現地での実践を通じて徐々に定着していくものであるという点である。研修で得た知識や経験は、日々の業務や農家との関わりの中で磨かれ、やがて組織や地域の力になっていく。今回のラオス調査では、そうした「途中経過」としての成果と課題が確認された。

今回は、日本で学んだ野菜生産技術が、現地の圃場や教育現場ですどのように活用されているのかについて、技術面に焦点を当てて報告する。